氏　名(本　籍)	杉浦謙介　(滋賀県)
学位の種類	博　　士(学術)
学位記番号	学術(情)第　5　号
学位授与年月日	平成16年3月11日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
最終学歴	平成元年3月　早稲田大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻 後期課程満期退学
論文題目	フーヘル研究 ―詩集のツィクルス構造と「徴」・「ことば」・少数民族形象―
論文審査委員	(主　査) 東北大学教授　関本英太郎　　東北大学教授　福地　肇 東北大学教授　森　淑仁　　東北大学助教授　長友　雅美 (文学研究科)　　(国際文化研究科)

論文内容要旨

ペーター・フーヘル(Peter Huchel 1903-1981)の人生には4つの時期がある。第1は、詩人としての立場を確立するまでの長い時期(1903－1947)、第2は、東ドイツの文学雑誌『意味と形式』の編集長時代(1948－1962)、第3は、東ドイツでの自宅軟禁時代(1963－1971)、第4は、西ドイツでの亡命生活時代(1971－1981)である。そして、フーヘルは各時期の詩篇を編集して、第1詩集『詩』(1948)、第2詩集『街道　街道』(1963)、第3詩集『余命』(1972)、第4詩集『第九時』(1979)を公刊している。これらの各詩集は、詩集のなかの詩篇どうしが関連をもちあって、詩集としての統一体(ツィクルス)を形成している。

第1詩集『詩』は3部構成になっている。第1部はフーヘルの幼少年時代、第2部は少年・青年時代、第3部は1933年から第2次世界大戦後までを題材にしている。つまり、20世紀前半のパノラマになっている。そして、このパノラマのなかで「民族・民衆の自立」の歴史が展開するように詩集が構成されている。すなわち、詩集の初め(20世紀初め)においては農村社会の底辺で苦しんでいた人々(民衆・少数民族)が、詩集の終わり(戦後)にはそのくびきから解放され、荒廃した農村を再建していく。このようなツィクルス構造には、詩集編集当時(1945－1948)のドイツ東部の思潮(ソ連の占領政策「民族・民衆の自立」)が反映している。

第2詩集『街道　街道』では、まず冒頭詩篇『徴』によって、「徴」・「ことば」のテーマが設定される。(「徴」とは、自然界から人間へと発信される特殊な形態を有した記号であり、ヨーロッパでは中世以来Signaturとしての伝統をもっている。また、「ことば」とは、フーヘルにとって、言語を中心にして、芸術、自然、人間、社会、歴史、詩人の生き方などのさまざまな問題が絡み合った複合体である。そして、フーヘルにおいては、「徴」と「ことば」は一対のテーマとなっている。) 詩集第III部では、この「徴」・「ことば」のテーマがフーヘルにおいてどのように形づくられていったかが、部内ツィクルスとして表現されている。一方、この詩集には「街道」モティーフが全体を貫通するかたちで埋め込まれている。その発端は、すでに詩集表題「街道　街道」(同語反復) に始まっている。「街道」モティーフは、第I部から第III部にかけて、世界各地の風景を繋いでいく。そして、第IV部第1詩篇『街道』に至る。しかし、この詩篇『街道』は、戦争で寸断された街道と難民の光景を描く。詩篇『街道』は、第I～III部の平和な時代から、第IV～V部の戦争と冷戦の時代への転換点になる。これにより、第IV部は第2次世界大戦末期の風景を描き、第V部は冷戦時代の「ことば」の問題を扱うことになる。詩集冒頭詩篇『徴』で提起され、第III部でその形成過程が示された「徴」・「ことば」のテーマは、詩集を貫く「街道」モティーフによって、冷戦時代の「徴」・「ことば」の問題へと展開してゆく。

第3詩集『余命』では、第I部第2詩篇に『応答』(>Antwort<)、第IV部第2詩篇に『応答不能』(>Keine Antwort<) を置いている。詩篇『応答』は、「徴」が成立する際の照応(Antwort)をテーマにし、詩篇『応答不能』は、「徴」の発現形態を示し、また、その「徴」に応答(Antwort)できない人間の「ことば」をテーマにしている。そして、両詩篇は第I部から第IV部へと関連の弧を描き、この弧が詩集全体にわたされることによって、「徴」・「ことば」のテーマが詩集全体を貫くことになる。しかも、詩集『余命』の冒頭詩篇『オフェーリア』はベルリンの壁で射殺された少女を題材にし、一方、詩集最後の第V部は東ドイツでの軟禁生活を直接的に映した詩篇を多く含む。つまり、詩集『余命』は、東ドイツの現状(1963-71) の描写を枠に構成されている。そして、その枠と「徴」・「ことば」のテーマが絡み合うことによって、詩集全体として、独裁的国家のなかの「ことば」の問題を扱う。

第4詩集、すなわち最後の詩集『第九時』では、冒頭詩篇が「徴」・「ことば」のテーマを呈示する。一方、最後の詩篇『崑崙山脈で』、そして、遺稿として付け加えられた第VI部の草稿においても「徴」・「ことば」のテーマが出てくる。詩集『第九時』もまた、「徴」・「ことば」のテーマを詩集の冒頭と最後に置いて、このテーマで詩集の枠組みを作っている。そして、この枠組みのなかで、東ドイツ出国後のフーヘルの生の問題を絡めて展開していく。詩

集第Ⅰ部は、全詩篇が古代の神話世界と関連し、ツィクルスとして、異郷での生活の苦悩を描いている。また、第Ⅰ部を始め、詩集全体に、追放された者（故郷に帰れない者）のさまざま形象が置かれ、縦糸をつくっている。そのなかで、ダンテ形象は、追放生活を「ことば」によって、すなわち、『神曲』を創作することによって克服した詩人としてフーヘルにとっては重い意味をもっている。このダンテ形象は、詩集第II部第1詩篇『出会い』と第IV部第2詩篇『あるトスカーナ人』に現われ、関連の弧を描いている。一方、詩集第II部最後の詩篇『第九時』(詩集表題と同じ、最初から数えて17番目、最後から数えて17番目の詩篇）はイエスの宗教性剥奪を示し、また詩集第III部最後の詩篇『魔術消去』はあるジプシーの魔術性剥奪を示し、両詩篇が詩集の中心部（第II・III部）で呼応している。このようにして、詩集全体のツィクルス構造体の中心部に「魔術消去」のモティーフが設定されている。これによって、詩篇『魔術消去』の後に位置している第IV部第2詩篇『あるトスカーナ人』のダンテも「魔術消去」をうけ、追放を「ことば」(創作）によって克服するのではなく、異郷での死へと向っていく。この詩篇の後に続く詩篇も異郷での死へのあきらめを表わしている。

このように、フーヘルの各詩集は詩集としてのツィクルス構造体を形成し、第2詩集『街道　街道』以降、第3詩集『余命』、第4詩集『第九時』において、それぞれのツィクルス構造体のなかで「徴」・「ことば」のテーマを展開している。

一方、少数民族形象もフーヘルの各詩集のツィクルス構造と深く結びついている。

詩集『詩』は、ツィクルス構造によって20世紀前半のパノラマを呈示すると同時に、そのなかで「民族・民衆の自立」のヴィジョンを示していた。この詩集では、第2詩篇『ヴェンデンの荒野』にヴェンデン人（ドイツ東部に6世紀ごろから住む少数民族）の苦難の歴史が比喩的に呈示され、そして最後の詩篇『帰郷』に、戦争で荒廃した農村の再建の先頭に立つヴェンデン人が描かれる。ヴェンデン人は、「民族・民衆の自立」の象徴となっている。

ジプシー形象も、詩集『詩』の冒頭第1詩篇『由来』において、農村の下層労働者として抑圧される民族・民衆として登場している。また、詩集『街道　街道』(1963) の冒頭詩篇『徴』は、「徴」・「ことば」ツィクルスの出発点となる詩篇であるが、そこにもジプシーの影が見られる。第II部の詩篇『バルチク近郊の峡谷』は、ブルガリアのジプシーを題材にしている。そして、日常世界のすぐそばに大量殺戮や呪術的世界が潜んでいることを示し、詩集第IV・V部（戦争と冷戦）への布石となっている。詩集『街道　街道』第III部は、部内ツィクルスとして、「徴」・「ことば」のテーマの成立を呈示しているが、そのなかの詩篇『カプート村の干草道』では、ジプシー形象がこのテーマと深くかかわっている。つまり、放浪のジプシーとはみだし者の詩人とを重ねあわせて、フーヘル自身がジプシーの運命を負おうとする。

ここに、詩人としての出発点がある。軟禁生活時代の詩集『余命』の「奇術師たちは去っていく」に始まる詩篇では、ジプシーたちが悪のはびこる地を去って行くが、これは、独裁国家からの亡命（詩集『余命』のツィクルス的テーマ）と重なる。亡命生活時代の詩集『第九時』は、ツィクルスとして漂泊の苦悩を表現している。この詩集の第 III 部結びの詩篇『魔術消去』は、詩集第 II 部結びの詩篇『第九時』と対になり詩集のツィクルス構造の骨格をつくっている。この詩篇『魔術消去』では、「追放された王」としてのジプシーが「魔術消去」をうける（化けの皮がはがされる）が、この「魔術消去」をうけるジプシーとはフーヘル自身に他ならない。このように、フーヘルにとってジプシー形象は、詩集のツィクルス構造と結びつきながら、フーヘル自身の運命を映す形象になっている。

ユダヤ・ヘブライ形象に関しては、詩集『余命』の詩篇『ヨルダン川の畔で』に、死を前にしたアブラハムが登場する。しかし、この詩篇には、フーヘルの幼少年時代の原風景が投影されている。そして、詩集『余命』の「忘却」モティーフが現われている。

詩集『余命』第 I 部第 4 詩篇『到着』は、北王国の滅亡という、古代イスラエル史の重要な事件を題材にしている。この詩篇は、『イザヤ書』に従って、北王国から敗走する兵士を描いているが、ここにフーヘルの第 2 次世界大戦末期の敗走体験が重なり、さらに、詩集『余命』のツィクルス構造と結びついて、東ドイツからの敗走＝亡命とその前後の危機的体験を表すようになっている。

詩集『余命』第 IV 部第 4 詩篇「11 月/...」は、捕囚地バビロンのケバル川の畔で神がエゼキエルに啓示を与える場面を引用している。しかし、この詩篇には、フーヘルの原風景が投影されている。この詩篇を擁する詩集『余命』第 IV 部は、ツィクルスとして、全体主義国家に押しつぶされる人間と別世界への亡命を表現している。このツィクルス構造によって、詩篇「11 月/...」の「捕虜」形象に、「亡命」形象との関連が生まれる。そして、詩篇「11 月/...」が詩集『余命』第 IV 部で第 4 詩篇の位置にあるがゆえに、詩集『余命』第 I 部で第 4 詩篇の位置にある詩篇『到着』の「敗走＝亡命」複合形象と呼応することになる。

詩集『第九時』の詩篇『アムモン人』に登場するアムモン人は、嫌々ながら、異郷で、旧友もなく、間近に迫った死に喜びも消えうせ、むなしい日々をおくっている。このようなアムモン人像は旧約聖書には存在しない。むしろ、亡命生活時代のフーヘル自身を強く反映している。一方、詩集『第九時』は、ツィクルスとして「異郷での死」を表現しているが、詩篇『アムモン人』もこのツィクルス構造と密接に結びついている。

このように、ヴェンデン形象、ジプシー形象、ユダヤ・ヘブライ形象というフーヘルの少数民族形象も詩集のツィクルス構造と深く結びついている。

一方、フーヘルは第2次世界大戦を敗走と難民の時代として捉え、これをツィクルスとして表現している。フーヘルのツィクルスのなかには、アウシュヴィッツ問題、すなわち、ユダヤ人に対するドイツ人の責任問題は存在しない。フーヘルの思想は詩集のツィクルス構造となって表れてくるので、フーヘルの歴史観のなかにアウシュヴィッツ問題は存在しないと言える。

以上のように、各詩集のツィクルス構造と「徴」・「ことば」のテーマそして少数民族形象は密接に結びついている。また、このツィクルス構造のなかに、フーヘルの世界観・歴史観、そして彼の思想が表現されている。

論文審査の結果の要旨

ドイツの現代詩人フーヘル(1903-1981)の詩の特徴に関しては、(1)詩集がツィクルス構造（詩集としての統一的構造）を有する、(2)詩形象が「徴」(自然から人間へと発信され、あるメッセージを含む形象)としての性格を有する、(3)少数民族の形象が重要な働きを有する、と言われてきたが、本格的な研究はまだなされていない。本論文は、この 3 点について、初めてその全体を網羅的かつ体系的に明らかにし、ツィクルス構造分析法という方法論を提起し、「徴」形象の記号論的考察を行なおうとしたもので、2 部 7 章及び「序」と「結び」から成る。

「序」では、フーヘルの略歴、フーヘル研究史の現況、本論文の問題提起、本論文の方法が簡潔に示されている。

第 1 部第 1 章では、第 1 詩集『詩』(1948)が、20 世紀前半の歴史をパノラマとして呈示するツィクルス構造を有することを初めて指摘している。

第 1 部第 2 章では、第 2 詩集『街道　街道』(1963)が、東西冷戦の時代状況を呈示し、そのなかで「徴」・「ことば」のテーマを展開するツィクルス構造を有することを初めて明らかにしている。

第 1 部第 3 章では、第 3 詩集『余命』(1972)が、詩人の東独での軟禁生活を反映するツィクルス構造を有すること、そして、この構造の要所に配置された「徴」形象の照応関係ならびに発現形態を初めて明らかにしている。これまで東独での軟禁生活の実体はつかめなかったが、詩集の全体構造の視点からこれを明らかにしている点、また「徴」形象の記号形態を詩のテクスト分析によって究明している点は、本論文の独創的成果であり、記号論研究にも資するところが少なくない。

第 1 部第 4 章では、最後の詩集『第九時』(1979)のツィクルス構造と照合させながら、フーヘル最晩年の秘儀的で難解な詩篇を初めて解読している。このツィクルス構造を視野に入れたテクスト解読は、方法論としても有意義である。

第 2 部第 1 章では、ヴェンデン人の形象について網羅的に考察しつつ、詩集『詩』のツィクルス構造分析によって、この詩集に、第 2 次世界大戦直後のソ連占領地区のパラダイム「民族・民衆の自立」が反映していることを初めて明らかにしている。これによってツィクルス構造分析法の新しい可能性を開拓している。

第 2 部第 2 章では、ジプシー形象が、フーヘルの全ての詩集のツィクルス構造においてそのかなめの位置に置かれ、各詩集のテーマと直結していることを初めて実証している。

第 2 部第 3 章では、ユダヤ・ヘブライ形象が、各詩集のツィクルス構造と結びつきながら、フーヘル自身の思想を反映していることを論証している。一方、アウシュヴィッツ問題についてフーヘルは直接的には発言していないが、全 4 詩集のツィクルス構造分析によって、彼の歴史観にはこの問題が存在しないことを論証している。これはこれまでの定説をくつがえす重要な成果である。さらにツィクルス構造分析法の大きな可能性を実証している。

「結び」は本論文の結論である。

以上要するに、本論文は、フーヘルの全詩集のツィクルス構造、フーヘルの「徴」形象、そして少数民族形象について、その全体を網羅的かつ体系的に究明し、さらにツィクルス構造分析を通じてフーヘルの思想や歴史観を解明し、ツィクルス構造分析法を基礎とした広く芸術作品研究一般に応用されうる方法論を提起している点で、フーヘル研究に寄与するのみならず、記号論研究、芸術作品研究など情報科学の境界領域の学術の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（学術）の学位論文として合格と認める。